

福岡県立大が「お墨付き」

足の悩みを靴で解決

靴で解決



「足にいい靴」試作品。つま先部分が高く、かかとがしっかり作られているのが特徴だ(靴総合技術研究所提供)

足の骨が成長しきっていない子どもや、外反母趾など足にトラブルを抱える人のため、福岡県立大(田川市)がNPOと手を組んで、ドイツ流の「足にいい靴」の共同開発に乗り出した。今秋にも生産を始める。「足と靴の相談室」を設けたり、相談員・技術者の養成講座を開いたりして、知識の普及や人材育成にも力を注ぐ。(河村克兵)

技術者育成も検討 NPOと連携

開発するのは、ドイツの整形外科靴づくりの技術を採用入れた革靴。9月中旬に、「県立大印」をつけた大人向けの3種を生産できるメドがついた。今後、子ども靴の開発も進め、品数を増やす。また、もともと足に重い障害がある人や、脳梗塞やリウマチ、交通事故などで足が不自由になった人のため、市販用とは別に医療用靴も作る。足の状態によっては個別に中敷きをあつらえるという。本体の生産は福岡県久留米市の靴靴メーカーが担う。県立大はドイツの技術を受け継いだ東京・新宿のNPO法人「靴総合技術研究所」にも技術指導にあたる。中敷きは同研究所が調整するが、いずれ県内でまかなえるよう、同県大牟田市のNPO法人「福祉でまちがよみがえる会」が



同僚の足の相談に乗る福岡県立大の中藤広美助手。今月から一般の相談を受け付ける。福岡県田川市

NPOと連携 独技術使い開発

技術者の養成に力を貸す。県立大が「足と靴」に取り組みきっかけは、学内の生涯福祉研究センターが進めていた介護用福祉用具の研究だった。その過程で靴の役割に目をつけ、06年から地域のは

ドイツの「整形外科靴」技術 第1次世界大戦で足を負傷した人に特殊な靴を作るため、整形外科医と靴職人が協力したのが始まり。1930年代後半には専門職「整形外科靴マイスター」の国家資格がつくられた。マイスターになるには製靴技術だけでなく、解剖学や生理学などの医学的知識が求められる。資格取得後は足に障害を抱える人の靴作りに医師とあたる。

に並びにくくなったという。県立大の呼びかけに応じた大牟田の「よみがえる会」の協力で、7月末から大牟田市内で「足の健康講座」と題した出前講座を始めた。11月未だに計10日の講座を終えた。中敷きを加工できる技術者養成に乗り出す。大学内でも今月から、足と

靴の研究を続けてきた中藤広美助手(幼児教育)が予約制の相談室(0947-42・2119)を開き、子どもの靴選びや、外反母趾や扁平足などのトラブルについて相談に乗る。看護学や体育学の教員らを中心に、糖尿病患者のフットケアにも対応できる人材を育てるための社会人講座を開くことも検討中だ。

中藤助手自身、かねて足が横に広がってしまっ開脚足に悩み、足に合う靴を探した経験を持つ。「自分の足のトラブルに気づいていない人は多いし、それを靴や歩き方でかなり解決できることを知らない人も多い。特に幼児の足の骨は軟らかく変形しやすいので、靴選びの大切さを分かっ

『朝日新聞』福岡版
2008.8.1. 夕刊

2020年4月14日厚生労働委員会

日本共産党 宮本徹 配布資料③

の取組が必らず 医師 処置としておと 詳細 が加担しているケースもあ 調査に乗り出している。

はもとよ 芝居を演じた 医師ができたおと うえで暗求していたのは、 この業者だけが同様の手口。

大 (月報形、折付也)